

芦屋市は文豪・谷崎潤一郎が愛したまち。最愛の妻・松子夫人とともに約2年半を過ごし、『細雪』の舞台にもなりました。『細雪』の中で谷崎は、六甲の山々の緑を望み澄んだ空を仰ぐことのできる、空気も清新で和やかな芦屋の地に住むよろこびを印象的に綴っています。没後60年を迎える今年、作品やゆかりの地を通して、谷崎と芦屋の深いつながりをご紹介します。



芦屋浜で行われていた地曳網漁
(絵葉書 大正～和初期発行 カラー化)



業平橋と阪神国道
(絵葉書 1937(昭和12)年頃撮影 カラー化)



『細雪』の四人姉妹のモデル
松子とその姉妹
前列左から次女・松子、長女・朝子、後列左から四女・信子、三女・重子、松子の長女・恵美子
(1949(昭和24)年)



阪急芦屋川駅と水道路(絵葉書 大正末頃発行)



開森橋の東岸にある『細雪』の文学碑(東芦屋町)
1986(昭和61)年に谷崎潤一郎の生誕100年を記念して芦屋文化協議会の文学碑建立実行委員会によって建てられました。「細雪」の題字は松子夫人の筆によります。

芦屋の日常生活 を丁寧に描く 『猫と庄造と二人のをんな』

谷崎潤一郎が「打出の家」(現在の富田碎花旧居)に暮らしていた頃に執筆された小説、『猫と庄造と二人のをんな』。1936(昭和11)年に発表されたこの作品には、当時の芦屋の生活風景が色濃く描かれています。物語の主人公は、芦屋の旧国道(現在の国道43号)近くで荒物屋を営む男・庄造。

庄造が溺愛する飼い猫のリリーを取り巻く2人の女(妻・福子と前妻・品子)の葛藤や人間模様を描いた物語で、売りが新鮮な魚を売り歩く声が響き、庶民が暮らす芦屋の下町の日常が、丁寧に描かれています。谷崎は人間の機微とともに、このまちの息づかいまでも作品に閉じ込めました。

「(芦屋では)地元の浜で獲れる鰯や鰯を、「鰯の取れとれ」「鰯の取れとれ」と呼びながら大概毎日売りに来る。「取れとれ」とは「取りたて」という義で、値段は一杯十銭から十五銭ぐらい、それで三、四人の家族のお数になるところから、よく売れると見えて一日に何人も来ることもある。」

「何というアテもなしに、(自転車の)ベルをやけに鳴らしながら芦屋川沿いの遊歩道をまっすぐ新国道(現在の国道2号)へと上ると、つい業平橋を渡って、ハンドルを神戸の方へ向けた。」

谷崎潤一郎 『猫と庄造と二人のをんな』

芦屋の風景とともに描かれた 谷崎文学の代表作『細雪』

『細雪』は、1936～1941(昭和11～16)年の間の大阪船場の旧家である蒔岡家の四人姉妹、鶴子・幸子・雪子・妙子の美しく華やかな生活風景を描いた長編小説です。四姉妹の人間模様や季節の移ろいが、優雅な筆致で描かれています。

中でも、芦屋にある次女・幸子の分家が物語の主な舞台として登場し、芦屋の風景が物語とともに深く息づいています。「高座の滝」「水道路」「阪急芦屋川」「JR(旧国鉄)芦屋駅」「業平橋」「阪神国道」「津知の停留所」、そして「芦屋の海岸」などが随所に登場します。

また、1938(昭和13)年に実際に起きた「阪神大水害」の場面では、濁流が押し寄せる迫力ある描写となっています。芦屋というまちの風景と、四姉妹のたおやかな暮らし。その両方が織り重なる『細雪』を描きたかったのかもしれません。

「この三人の姉妹(幸子・雪子・妙子)が、たまたま天気の良い日などに、土地の人が水道路(すいどうみち)と呼んでいる、阪急の線路に並行した山側の路を、余所(よそ)行きの衣裳(いしょう)を着飾って連れ立って歩いて行く姿は、さすがに人の目を惹(ひ)かずにはいなかったの、・・・」

谷崎潤一郎 『細雪』

谷崎文学の世界にふれる場所—芦屋市谷崎潤一郎記念館



谷崎潤一郎記念館は谷崎が愛した芦屋の地に、1988(昭和63)年開館しました。松子夫人をはじめとするご遺族や多くの方々から寄贈された直筆の原稿や書簡、初版本など貴重な資料が公開されています。静かな時間が流れる記念館で、谷崎の作品世界にじっくりと浸ってみませんか。

谷崎潤一郎記念館の催しは
本紙9ページで案内しています。



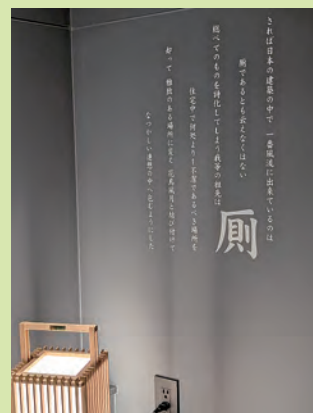
ホームページ



谷崎潤一郎の生涯と文学を展示



谷崎愛用の文机・文具等を展示した書斎コーナー



『陰翳礼讃』をモチーフにしたトイレ

問い合わせ 谷崎潤一郎記念館 ☎ 23-5852 (〒659-0052伊勢町12-15)